

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463471

研究課題名(和文)施設及び在宅における要介護高齢者のType II コミュニケーションスケールの開発

研究課題名(英文) Development of Type II communication scale of elderly people who need long-term care in geriatric facilities and in home care

研究代表者

深谷 安子 (FUKAYA, YASUKO)

関東学院大学・看護学部・教授

研究者番号：20238447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：要介護高齢者にとってのタイプ II コミュニケーションの重要性について内外に発信し、施設ケア及び在宅ケアにおける高齢者のタイプ II コミュニケーションの簡便で効率的な測定方法を開発した。本研究の成果は、書籍「看護におけるコミュニケーション・パラダイムの転換」として出版した。また、本研究は国際的にも高い評価が得られ、Fukayaらの論文(2016)は世界の看護に寄与した10論文に選ばれた。FukayaはWorld Academic Championship -2018 in Nursing においてWinnerに選ばれた(Clinical Communication)。

研究成果の概要(英文)：We have disseminated the importance of type II communication to the elderly who need long-term care and have developed a simple and efficient measurement method for type II communication of the elderly in the care facilities and home care. The outcome of this research was published by the Kanto Gakuin University Press as "Change of communication paradigm in nursing." In addition, this research has gained high international reputation, and the paper by Fukaya et al. (2016) was selected as 10 articles contributing to nursing in the world. Fukaya, Y was elected Winner at World Academic Championship - 2018 in Nursing (Clinical Communication).

研究分野：看護学

キーワード：コミュニケーション タイプ II コミュニケーション 高齢者 尺度開発 在宅ケア 施設ケア

1. 研究開始当初の背景

コミュニケーションは、高齢者とケア提供者との関係性の構築、維持、発展に重要な意味を持つ。しかし、看護師は心理社会的コミュニケーションの重要性は認知しているものの、実際は高齢者とのコミュニケーションは主に仕事のための手段として用いられてきた。そのために高齢者施設におけるコミュニケーションに関しては、社会的交流の少なさ(Grau, Chandler & Saunders, 1995)、言語的コミュニケーションの量の不足(Burgio, et al, 2001)、表面的なコミュニケーション(Hewison, 1995)などの問題が指摘されている。

日本においては看護・介護スタッフと高齢者のコミュニケーションの研究は少なく、申請者らはこれまでに2回の研究を実施した。初回の研究はコミュニケーションの実態把握を目的とした(Fukaya, 2004)。その結果、高齢者の発語時間は1日平均約4分と非常に少ないことを明らかにした。その理由は、介護施設の職員と高齢者とのコミュニケーションには、高齢者への医療処置や日常生活ケアといった看護や介護業務に基づいた会話である「タイプ コミュニケーション:業務関連コミュニケーション」と、社会生活の中で普段に話されている個人の生活世界に関連する「タイプ コミュニケーション:生活世界コミュニケーション」の2種類があり、施設内の全コミュニケーションの75.9%を「タイプ コミュニケーション」が占めているためであることがわかった。スタッフは高齢者より確実に効率的な回答を求めするために、スタッフからの質問とそれに対する高齢者の回答(はい、いいえ)といった1方向性のコミュニケーションパターンを取るために、高齢者の発語が著しく制約されていた。また、職員にとって看護・介護業務が優先され、タイプ コミュニケーションは必要なケアとして認識されていなかった。

そのため2回目の研究では、ケア提供者に対してタイプ コミュニケーションの重要性に関する教育プログラムの介入と評価を行った(Fukaya, 2009)。その結果、ケア提供者の「タイプ コミュニケーション」の増加は高齢者の自発発語を促し、発語時間を増大させることがわかった。高齢社会を迎え今後多くの高齢者が人生の最後の時を施設の中で過ごすことになるであろう。また、近年の医療技術の進歩、介護保険制度等のサービスの発達により、重度疾病や障害を抱えながらも住み慣れた家で暮らす在宅療養高齢者も増大している。しかし一方で、世帯構成の変化から高齢者のみ世帯が増加し、高齢者が高齢者を介護する老老介護が社会問題化されている。このような在宅療養高齢者を取り巻く環境の諸問題は、在宅療養高齢者と介護者とのコミュニケーションにも大きな影響を与えている可能性がある。したがって、施設並びに在宅における要介護高齢者の療養環境のあり方を考えるうえでコミュニケーションは重要な要素となりうる。その中でも、特にタイプ コミュニケーションは高齢者の生活の質に影響を与えるだけでなく、その不足は、高齢者の精神の不活発化や認知症の発生に影響する可能性もある。よって今後、高齢者のタイプ コミュニケーションと精神の活性化との関連性の実証研究、施設スタッフのタイプ コミュニケーションを促進するためのより効果的な教育プログラムの開発、療養者とのコミュニケーションに不足がある家族への支援のあり方の研究などが必要である。しかし日常生活におけるコミュニケーションの種類と時間の測定には、調査や解析に多くの時間を要し、多数の調査員と多額の調査経費も必要となる。そのためにタイプ コミュニケーションに関する研究を推進するには、施設や在宅の要介護高齢者に対して簡便に測定できるスケールの開発が急務の課題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、施設並びに在宅における要介護高齢者のタイプ コミュニケーション時間を測定できるスケールの開発を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 暫定版タイプ コミュニケーションスケール (Life worldly communication scale:以下 LWCS と略す) の質問項目の作成

質問項目は、質的先行研究により抽出されたタイプ 発語を構成する話題 9 項目 (過去の生活体験、家族の話題、友人・知人の話題、社会的事柄、趣味・嗜好、心理状態、挨拶、天候、身近な生活) と、高齢者の自発性やタイプ 発語を促す介護者の関わりに関する 7 項目 (発語の自発性、話したい話題、言いたい事、発語の促し、傾聴、トピックの提供、高齢者への関心) の合計 16 項目を選定した。項目数は高齢者にとって負担にならないように出来る限り少なくした。項目毎に、全く話さなかった (0 点) から、たくさん話した (4 点) までの 4 段階のリッカートスケールを作成した。項目間相関や項目・総得点相関などの項目分析の結果、2 項目間に強い相関がみられたために、そのうち 1 項目を除外して、暫定版 LWCS は 15 項目とした。

(2) 調査方法

調査内容;性別、年齢、ADL 状態(FIM)、認知障害の程度 (長谷川式簡易知能評価スケール)、CES-D、QOL;主観的幸福感(PGC、VAS)、協調性幸福感

コミュニケーション時間調査;調査対象者 65 名の 1 日 (AM9 時から PM5 時まで) の施設スタッフとのコミュニケーションの全てを IC レコーダーで録音した。

暫定版 LWCS 調査並びにリテスト

(3) 分析方法

タイプ コミュニケーションの弁別と回数・時間の測定

タイプ コミュニケーションタイプの弁別は、まず録音場面から作成された逐語録の会話内容を、「高齢者の発語のタイプ分類表」に基づいて、タイプ 発語のサブカテゴリー毎に弁別した。種類別の発語回数は 1 センテンスを 1 回として換算した。所要時間の算出は、時間比較を可能にするために逐語録のかな 2 文字を 1 秒として換算した。

LWCS の信頼性・妥当性の検討

LWCS 信頼性は、因子分析と kappa 統計による質問項目の決定、Cronbach's 信頼性係数による内的整合性の検討、テスト・リテスト相関係数による安定性の検討を行なった。LWCS の妥当性は、因子分析 (最尤法、プロマックス回転) に基づいた構成概念妥当性の検討、LWCS とタイプ 発語時間の相関に基づいた基準関連妥当性の検討、LWCS と QOL (主観的幸福感: PGC モラールスケール、VAS、協調性幸福感) 並びに抑うつ度 (CES-D) との相関による併存妥当性の検討を行なった。

(4) 研究対象者

研究対象者は、男性 27 名 (41.5%)、女性 38 名 (58.5%) の要介護高齢者 65 名 (施設 41 名、在宅 24 名) で、平均年齢は 84.00 歳 (SD=6.61) であった。認知症無し (HDSR 21) は 45 名 (69.2%) であったが、20 名 (30.8%) には認知症を認めた (HDSR 20)。鬱を有する者は (CESD 16) は 17 名 (26.1%) であった。

4. 研究成果

LWCS の得点可能範囲は 0 から 60 点であるが、65 名の高齢者の得点は 0 から 40 点の範囲で、平均 19.81 (SD=11.56) であった。

LWCS の信頼性は内的一貫性と安定性から検討したが、Cronbach's $\alpha=0.92$ で高い内的一貫性を示し、テスト・リテストは $r=0.69$ ($P=.000$) と安定性が認められ、その信頼性が証明された。

LWCS の妥当性は、構成概念妥当性、基準関連妥当性、並存妥当性の3側面から検討した。

LWCS の構成概念妥当性は、因子分析(最尤法、プロマックス回転)により検討したが、固有値1以上の共通因子が3因子抽出された。初期の固有値は第一因子が7.24と高く、第二因子は1.59、第三因子は1.02と急激に低下した。回転後の3つの共通因子の累積寄与率は58.49%を示した。パターン行列から各因子に相関が強い項目の共通性を解釈して、第一因子は日常生活における話題、第二因子は介護者の聴く態度、第三因子は会話の促しと命名した。LWCSのこれらの構成要素は理論的構成要素に合致し、LWCSは構成概念妥当性を持つことが示された。

LWCSの基準関連妥当性は、LWCSとタイプ発語時間との相関から検討したが、両者に有意な強い相関($r=0.66, p<.001$)が認められ、LWCSは基準関連妥当性を持つことが示された。

LWCSの並存妥当性は、LWCSとQOL(PGCモラールスケール;施設、協調性幸福感、VAS;在宅)との相関、LWCSと抑うつ(CES-D)との相関から検討した。施設高齢者においてはLWCSとPGCモラールスケール間に有意な相関が認められなかった。しかし、在宅高齢者においては、LWCSとVAS間に有意な相関($r=0.63, p<.01$)、LWCSと協調性幸福感間に有意な相関($r=0.50, p<.05$)を認め、LWCSとCES-D間にも有意な弱い相関($r=-0.27, p<.05$)を認め、LWCSは並存妥当性を持つことも示された。

以上より、LWCSは施設並びに在宅における要介護高齢者のタイプコミュニケーションを簡便に測定できる尺度として、有効であると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Fukaya, Y., Kitamura, T., Koyama S., Yamakuma, K., Sato, S. (2016) Analysis of Utterances by Older Persons in 'Life-Worldly' Communication with Caregivers in Japan, Journal of Nursing and Care, 5, 5. (査読有り)

<https://www.omicsgroup.org/journals/analysis-of-utterances-by-older-persons-in-39lifeworldly39-communication-with-caregivers-in-japan-2167-1168-1000367.pdf>

Fukaya, Y. (2017) Conversion of the Communication Paradigm for People at the End of Their Life. Palliative Medicine and Care, 4(2):1-3.

(査読無し)

Fukaya, Y., Kitamura, T. (2018) Towards a Conversion of the Nursing communication Paradigm: A View from the Analysis of Actual Nurse-Elderly Interactions, Advanced Practices in Nursing, 3:1 DOI: 10.4172/2573-0347.1000145 (査読有り)

[学会発表](計3件)

Fukaya, Y., Wakabayashi, R., Tomehata, S., Sato, S., Kitamura, T. (2017) Study on the Development of Quality of Communication for Elderly (QOCE) Scale in Home care, 3rd World Congress on Nursing & Healthcare, November 09-11, Valencia, Spain (Invitation)

Fukaya, Y. (2017) The Importance of Living World Communication to Elderly People Requiring Long-Term Care, 37th Asia-Pacific Nursing and Medicare Summit October 20-21, Osaka, Japan (keynote)

Fukaya, Y., Wakabayashi, R., Yamakuma, K., Tomehata, S., Sato, S., Kitamura, T. (2016) The Development of the Quality of Communication for the Elderly (QOCE) Scale in Nursing Care Facilities or home

based care, World Nursing-2016, August
15-17, London. (Invitation)

〔図書〕(計1件)

深谷安子、北村隆憲編 (2018) 看護におけるコミュニケーション・パラダイムの転換-ケアとしてのコミュニケーション、
関東学院大学出版会

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深谷安子(FUKAYA YASUKO)
関東学院大学・看護学部・教授
研究者番号：20238447

(2) 研究分担者

北村隆憲 (KITAMURA TAKANORI)
東海大学・法学部・教授
研究者番号：00234279

(3) 連携研究者

若林律子 (WAKABAYASHI RITSUKO)
関東学院大学・看護学部・准教授
研究者番号：20609359

(4) 連携研究者

山之井麻衣 (YAMANOI MAI)
東京医療保健大学・医療保健学部・講師
研究者番号：10538151